

平成 27 年度諏訪東京理科大学学位記授与式学長告辞

本日、卒業や修了の日を迎えられる学生、院生の皆さんに、まずは心から、お祝いを言いたいと思います。同時に、ご参列いただいているご両親やご家族の皆様にも、ここまで大切に育てて来られたお子様が、今日のこの日を迎えられたことに、心からのお喜びを申し上げたいと思います。また、本日は来賓として茅野市副市長樋口尚宏様、茅野商工会議所会頭宮坂孝雄様のご臨席を賜っておりますことを、厚く御礼申し上げます。加えて、学校法人東京理科大学からは、本山和夫理事長と、同窓会から石神一郎会長が参列しておりますことを、ご紹介させていただきます。

今日、学部を卒業する皆さんが本学に入学されたのは、東日本大震災の翌年でした。大学院を修了する方々にとっては、在学中に大震災が起きました。長野県でも、大震災に続いて起こった栄村の震災、それから一昨年の御嶽山噴火などの大きな災害もありました。ですから、皆さんの在学期間は日本の社会にとって、とても重苦しい時期と重なりました。この様な困難な時期にもかかわらず、ご家族の皆様には、ここにいる学生諸君を今日まで支えて頂いたことに、心からお礼を申し上げます。学生の皆さんも、今日、卒業できるのは、ご両親、ご家族の物心両面にわたる支えのおかげであることを、よく心に留めて下さい。他方、このような中で、本学の学生諸君が中心になって、長野県内の大学生が連携して栄村や御嶽山の被災地に義援金を届けることができたのは、私としても、大変うれしいことでした。

さて、この一年間の我々の周りでの明るい出来事は、大村智(さとし)先生がノーベル生理学・医学賞を受賞されたことです。すでに皆さんもご存じと思いますが、大村先生は、我々の母体校である東京理科大学の大学院修士課程で化学を研究され、その後東京理科大学から理学博士の学位も授与されています。ですから、皆さんは、理窓会という同窓会を通して、ノーベル賞受賞者と同窓ということになります。しかも、大村先生は、ここからは車で1時間程の山梨県韮崎市のご出身で、高等学校はご生家からも近い韮崎高校のご出身です。今日の卒業生の皆さんの中にも、韮崎高校の出身者が三人います。大学は、これも地元の山梨大学で学び卒業されました。そのため、もらったノーベル賞の賞金は、半分ずつを山梨大学と東京理科大学にご寄附頂いています。

韮崎のご生家は、わたしも先日訪れてみましたが、小淵沢を過ぎて甲府に向かう途中のこちらから行くと右側の山麓にあります。かなり急な斜面ですが、見晴らしも大変すばらしく、大村先生が何事にもこつこつと取り組み、そして同時に世の人のためにも尽くされるお人柄は、このような風土から生まれたものだと思います。

大村先生は、山梨大学の学芸学部で化学の勉強をされて、ご自分でもまたご両親も、地元山梨県の高等学校の先生になりたいと思っておられたようですが、ご卒業の年はあいにく山梨県では理科の高校教員の採用がなかったと言うことで、結局は、東京で夜間の都立高校の教員として就職されました。このことが、昼には東京理科大学の大学院で学ぶことに繋がり、そこで物質の性質を詳しく調べる核磁気共鳴という当時では最先端の技術を身につけられることが出来ました。この技術があったおかげで、のちに北里研究所に勤められてから、どんどん新しい研究成果を挙げられたのです。

それにつけて思い出すのは、大村先生の人生の心得七か条です。七か条の一つに、「役目が与えられたときには、それに自分の能力の全てを尽くす」というのがあります。これは、先生のこのようなご経歴から、見出された人生の心得でしょう。わたしも、自分の人生を振り返ったとき、決していつも自分の望む途を歩んできた訳ではありませんでした。むしろ、人生の大きな転換点は、予想外のことから始まりました、しかし、与えられた途に一生懸

命で励んでいると、そのうちに助けてくれる人や状況が現れて何とか途が開けたことを何度も経験してきました。皆さんは、これから社会に出れば、まず何かの新しい仕事を与えられます。そのとき、この大村先生の「役目が与えられたときには、自分の能力の全てを尽くす」という言葉を思い出して、まずは、それに全力で取り組んで下さい。これが、今日の卒業式に当たって、私がお伝えしたい言葉の一つです。

この大村先生の人生の心得七か条というのは、それぞれが味わい深いのですが、ここでは、その全部は紹介することは出来ませんが、もう一つ、「何事も人のまねをしない」、と言うのがあります。これは、研究室の先生から教わったのではなく、大学時代のスキーのコーチの、「人まねでは、その人のレベル止まり。新しいことをすると、うまく行かないこともあるが、人を超えるチャンスが生まれる」という言葉から学ばれたそうです。

しかし、ただ人まねをしないだけではなく、七か条の他の一つでは、「歴史に学び、それを基に未来を見つめる」とも言っておられます。ただ勝手に自分の思いつきで事を進めるのではなく、先人に学び、その上で自分の独創性を加えてこそ、人を抜くことが出来るのです。これは、研究だけではありません。これから皆さんが社会に出て取り組むどんな仕事にも当てはまるものです。この「歴史に学び、未来を見つめる」、その上で「何事も人のまねをしない」という二つの言葉をセットで、今日、わたしが皆さんに贈るもう一つの言葉としたいと思います。

いま世の中はグローバル化の時代ですが、大村先生のご活動は、とても早い時期からグローバルなものでした。先生は、いまから40年以上も前の1973年に、アメリカの製薬会社メルク社と協定を結ばれ、大村先生が日本で、役に立つ微生物を探し出し、それをもとにアメリカの会社が薬に開発し、利益が出た場合には特許の実施料を大村先生に支払い、それを基にさらに日本で新しい微生物の探索を行うという、国際的な仕組みを作られました。このようにして開発された新しい薬品は、二億人ものアフリカの人々を失明や命に関わる病から救い、さらに東南アジアの風土病の退治にも貢献しました。まさにグローバルなご活動です。

いま世界は、最近の情報通信技術を通して、どこにいても、世界中で起こったことを知り、しかも自ら世界に発信することを可能にしました。政治も、経済もそして私たち一人一人の生活も、いま、世界はこれまでになかったほどに、繋がっています。皆さんは、これまでの学生時代には、情報のグローバル化をむしろ楽しんでいたと思いますが、これからは、自らの生活を成り立たせていくために、このようなグローバル化した社会の仕組みと向き合わなければならないでしょう。それを不安に思っている人もいるかも知れません。しかし皆さんには、この四年間を通じて、それに向き合える準備もしてもらっています。とくに何人かの人たちは、海外インターンシップの機会を通して、このグローバル化を実際に体験してもらいました。どうか勇気と自信を持って、このグローバル化する社会に旅立って下さい。

さて、この長野県での最近の明るいもう一つの話に、長野県川上村出身の宇宙飛行士、油井亀美也さんが、国際宇宙ステーションでの任務を立派に終えて帰還されたことがあります。ちょうど先週の土曜日に、川上村と塩尻市で報告の講演会がありました。油井さんは、自衛隊のパイロットをしておられて、平成21年に39才という比較的若い年齢で宇宙飛行士の訓練生としてJAXAに採用され、ご自身でも中年の星と言っておられました。私は、その頃国際宇宙ステーション「きぼう」での実験をつくば宇宙センターからやっていたので、ちょうど私が当番で実験をしていたときに、油井さんがJAXA内の見学で来られて、お会いしています。そのとき、私が茅野にある諏訪東京理科大学に勤務していると言いましたところ、自分は航空自衛隊では岐阜県の各務原に勤務していたので、実家のある川上村に帰るときに車でよく通った道なので、その大学があることはよく知っていると言っておられました。先日の塩尻での講演会の時にも、個別にお会い出来たので、そんなお話をし、今週には卒業式があるので、ぜひ学生達にメッセージを下さいと言ったところ、快くサインを書いて下さいました。「挑む」、という言葉です。ご自分は39才から宇宙飛行士を目指して宇宙に行ったけれども、学生諸君はずっと若いものだから、自分の目指すことに挑戦してほしいと言う意味です。頂いたサインはこの会場の出口に展示してありますので、ご覧になって下さい。

最後に皆さんにお願いしたいことは、卒業した後も、機会あるごとに美しい八ヶ岳山麓にあるこの大学を思い出して、訪れてほしいと言うことです。そうして、うまく行ったこともそうでなかったことも、お話を聞かせて下さい。この大学も皆さんのお役に少しでも立つことが出来ると思いますし、また、卒業後の社会での体験を聞かせてもらうことは、私たちにも大きな成長の糧ともなります。

さて皆さんもご存じでしょうが、この大学も、今後さらに地元地域のお役に立つことが出来るように、そしてまた六千人を超える卒業生を引き続きサポートしてゆけるように、本学の将来のありかたについて、茅野市をはじめとする地元自治体、さらには長野県とご相談をさせて頂いているところです。今後、大学としての改革も進めながら、この大学も皆さんと共に将来に向かって成長していけるように、力を尽くして行きたいと思っております。

では、最後にもう一度、今日のご卒業を心からお祝いして、私の告辞といたします。

平成 28 年 3 月 23 日

諏訪東京理科大学 学長 河村 洋